



須磨海浜水族園 亀ちゃんの あっぱれ! 水の動物たち



へビだらけの沖縄・屋嘉比島へ



ウミガメの巣穴の上を探索するアカマタ

嫌いに勝る好奇心

①屋嘉比島に上陸する調査隊②おもむろに砂の中にもぐるアカマタ

琉球大学に池原貞雄先生という動物学者がおられた。私がまだ沖縄・八重山に住んでて駆け出しのウミガメ研究者だった頃のことである。先生は会う度に「亀崎くん、ヤカビ島に行ったことある?」一度、行ってきなさい。あそこアカマタはね、砂浜でウミガメの子ガメが出てくるのを待ち伏せして、次から次に食べるんだよ。ヤカビ島とは慶良間諸島の西の端にある無人島で「屋嘉比島」と書く。アカマタとは南西諸島にすむへビの一種で、成長すると2

アカマタに興味がないはずはない。私も池原先生の言葉が気になっていたので、意を決した。当時、琉球大学にいた太田英利博士や多くの動物研究者にも参加してもらい、屋嘉比島の調査を履行したのである。

1993年の7月、我々は屋嘉比島にゴムボートで上陸した。初めて渡る島の調査はワクワクするものだが、今回は何か嫌な予感があった。夕方いつもの調査のように砂浜を歩き、ウミガメの産卵跡を探す。すると、アダンの林の

際にもなる大蛇である。私はへビが大の苦手だ、草むらから出てきたシマへビに驚き、5歳の娘を用水路に突き落として逃げた男である。その島に興味湧かないことはないが、へビだらけの恐ろしい島には絶対行かないと心に決めていた。

ところが、私が研究しているウミガメが爬虫類であるためか、私の周りにはへビ研究者もウヨウヨしている。その一人が森哲博士である。最悪なことに、京大時代には同じ部屋のことがあり、彼が部屋でへビを逃がすと、必ず私の机の下とか本棚の上にいるのである。私はその度に体調が悪化し早退していた。その森さんはへビの行動学が専門である。子ガメを食べる

際にもなる大蛇である。実際ウミガメの産卵跡を発見した。さっそく、膝をついて砂を掘りはじめた。カメの巣穴を掘るのはコツがいる。指先に神経を集中し、ゆっくりと砂を掘っていく。掘り始めて10分くらいだろうか。左の膝に何かものがのったような違和感で、左膝に目をやった瞬間である。私は超ハイスピードで5分ほど海側に跳ねた。何が起ったのか分からないが、私の脳裏には、私の膝に頭をのせて、掘っているカメの巣穴の底をのぞき込む巨大なアカマタの姿が焼き付いていた。私の体はそのへビの姿に反射的に反応したらしい。

私の悲鳴を聞きつけた仲間、すぐさまやってきてアカマタの観察を始めた。アカマ

出ず、太田、森のへビ先生たちは歓喜の表情でデータをとっている。固唾をのんで見守る我々の前で、そのアカマタは3匹の子ガメを食べて、やがて、アダンの林に帰って行った。

それにしても、私はなぜこんなにへビが嫌いなのだろうか? 別にへビに何かされたわけでもなく、不利益を被ったこともない。単に姿や形が嫌なだけだ。しかし、理由もなく好きだ、嫌いだと本能的に決めつけてしまうのは、理知的な動物である人間として問題であろう。でも、好き嫌いに理由を求めると、プロ野球やサッカーなどは、応援すべきチームが分からなくなり面白くなくなる。「嫌い」も結構奥深い。

◇

須磨海浜水族園で開催中の特別展「世界が恋する海! 座間味村!!」で、本物のアカマタと子ガメを見ることが出来ます。ただし、子ガメを餌として与えることはありませぬ。来年2月15日まで。

|| 次回は来年1月10日

亀崎直樹(かめざき・なおき)
1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園学術研究統括。元園長。岡山理科大学生物地球学部教授。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。